旅」に参加させて頂き、引揚げ途中亡くなった方々を埋葬した場所を訪ね、供養してくれました。長女にしてみれば、あの戦争がなければ弟たちも一緒に元気に暮らしているだろうにと思いながらも、この旅に参加して供養に勤めたことで、胸のつかえがおりたようだと話してくれました。この話を聞いて、主人も私もいつも心の隅に引っかかっていたわだかまりが解け、肩の荷が軽くなりました。

主人は平成四年に九十一歳で亡くなりました。現在、私は老人クラブに加入して、皆さんと楽しく旅行をしたり、書道のサークルに参加したり健康ダンスに興じたり、楽しい日々を送っています。このように幸せな毎日を送っていられるのも、あの引揚げの体験や北海道開拓の試練に負けないで頑張ってきたからだ、と思っております。これからも何事も前向きに考え、子供たちに迷惑を掛けないように過ごしたいと願っています。

ノーモア　満州

岩手県　多田　愰

一　ひとときの平和

昭和十二（一九三七）年五月二十一日、私は当時岩手県和賀郡土沢町大字北成島（現在の和賀郡東和町）で生まれた。昭和十二年というと、日中全面戦争に発展していくきっかけとなった盧溝橋（ロコウキョウ）事件が起こった年である。前年の昭和十一年には二・二六事件が起こるなど、軍国主義が色濃くなっていった時代であった。

私が引揚げ後成人してから、私の家の戸籍を見てみると、明治三十七（一九〇四）年三月十七日に分家していて、資産としては山あいに猫の額ほどの田畑を持っているだけで、経済的には貧しかったようである。祖父母が毎日細々と農作業を続け、父は黒沢尻（現在の北上市）にあるK銀行

（当時は無尽会社といわれていた）に勤めていたが、給料はわずかでとても一家を支えるには足りず、私たちの暮らしはじり貧状態であったようである。祖母は農作業の傍ら縄をなっては近所の農家に買ってもらったり、祭りのときには串団子を作って売ったりして家計の足しにするなど、苦労が絶えなかったらしい。

我が家の曾父母は元治元（一八六四）年の生まれ、祖父母と父が明治の生まれで、封建社会の階級制度である戸籍上の身分では士族であったから、しつけについては厳格だったようである。商家の長女としてわがままに育ってきた母が、まるっきり様子の違う貧乏士族の家庭に入り、経験のない農作業もやらければならない上に姑、小姑がいて、何かにつけて小うるさい我が家の生活になじめなかったと思われる節があった。母は、我慢ができなくなると乳飲み子の私を放り出して、実家に帰ってしまうことがしょっちゅうで、それがもとで離婚寸前まで話が進んだこともあったと、随分あとになってから叔母に聞いたことがある。祖母は、母に対してしつけなどうるさい姑であったが、孫である私の将来のために、母の態度についても我慢して結局は離婚させなかったということであった。祖父は私を大変かわいがり、毎晩私を抱いて寝ていたほどで、目に入れても痛くないというのはこんなものかと思ったくらいであった。私も祖父が大好きで、後に避難の途中匪賊の凶弾に倒れるまで「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼んでは、いつもそばから離れなかったことを覚えている。清貧に甘んじて、間違ったことは決してしなかった祖父母を思い出すたびに、戦争など無ければもっと長生きして私をよりよく育んでくれたであろうにと、五十回忌が過ぎた今でも残念に思うのである。

岩手の小さな田舎町でのつましい生活が続く中で、昭和十六年六月二日、妹の郁子が生まれた。その六カ月後には、日本軍がハワイの真珠湾を奇襲し、太平洋戦争に突入したのである。軍事色が

だんだん強まってゆくにつれて、片田舎にも戦争の影響が強く現れて物資が欠乏し始め、国民は耐乏生活を強いられるようになってきた。もともと質素な暮らしぶりだった我が家にも影響が及んできた。そのようなときに、我が家に満州移住の話が持ち込まれたのであった。

二　いざ満州へ

私たちの家族が満州への移住を決意したのには、次のような事情があったのである。まず、叔父が昭和十五年単身で満州に渡り、奉天（瀋陽）市の満蒙毛織という紡績会社に入社、翌昭和十六年には結婚のため一時帰国したが、満州に永住する決心をして再度渡満した。次いで昭和十七年には、叔母が満州熱河省に赴任していた人と結婚して、慌ただしく渡満したのである。しかし、祖父にとってみれば息子と娘の二人が満州に渡ったということもあったが、それにも増して自身の体験が大きく影響していたように思われるのである。日露戦争で満州に出征して広大な大陸を転戦し、あの肥沃な大地を自分自身で見て来ているのであった。「岩手の狭い農地であくせくしているより、思い切って満州に渡り、大きくやってみよう」、そう考えて移住を決意したに違いないと思う。

父は父で、満州移住の情報を得て、渡満の決心を固めつつあったが、既に自分の弟と妹が大陸に渡って生活しているので、満州は身近なこととして考えていた。自分が家族共々渡満すれば、一族全員が満州で暮らせる。そう考えて、一部の反対を押し切って満州永住を決意したのであった。

昭和十八年春、満州移住の決行である。父は、県の要請で満蒙開拓団日本人学校の教員を拝命した。移住のために準備したのは、必要最低限の衣類と日用品だけという質素なものであった。分家のときにもらって以来、四十年間住み慣れた土地、建物や家財道具は出発前に全部競売に掛けて処分し、渡航の費用と当面の生活費に充てることになった。祖父と父は、その大事なお金の中か

ら、私のために一振りの軍刀を買い求めてくれた。「お前が大きくなって立派な軍人になったら使うのだ」と言っていたが、幼い私の将来に期待を込めてのことだったらしい。代々士族として南部藩に仕えた我が家には、先祖伝来の太刀が二振りと短刀があったが、これも一緒に持って行った。

出発の日が近付いてくると、遠い満州に行く私たち家族のことを心配して、別れを惜しみ大勢の人が集まってくれた。女性が多かった。

祖母はわずか十六歳で祖父のもとに嫁ぎ、地域一番の働き手だったという。田植えをしても、その早さはだれにも負けない気丈な人であった。長女であった祖母の兄弟姉妹たちは、「なぜ遠い満州に行ってしまうのか」と、みんなで泣いてその移住に反対したし、祖母も移住について積極的ではなかったが、家族が決めた満州移住について、ついに異を唱えることはできなかった。

我が家には、当時七十九歳になる曾祖母がいた。幼い私を寝かしつけるため、南部に伝わる昔話や、遠野地方に残っている河童の話などとても面白く語ってくれた。祖父母以下は、曾祖母にも同行するよう説明し説得を重ねたが、ついに首を縦に振ることはなかったという。「私は満州には行かない。このまま日本に残る」と頑固であった。年齢が年齢だけに祖父母以下家族もついにあきらめ、祖父の弟家族に頼んで面倒を見てもらうことになった。曾祖母は、私たち家族のことを片時も忘れず心配し続けていたという。そのとき六歳だった幼い私には、別れのつらさ、悲しさを理解し得なかったのは当然だったが、これが永久の別れとなった。

私の母の実家でも反対であったという。母も祖母と同じく長女で、両親から大事に育てられた人である。移住が決まったころには、母の父は既に他界していたが、残った家族みんなが私たち家族の移住を悲しんだと聞いている。

三　さらば祖国

いよいよ満州へ出発する日がきた。釜石線の土沢駅には、大勢の人が見送りに来てくれたそうである。幼い私には、一家で旅行にでも出掛けるような気分であったと思う。長年お世話になった人々と家族が駅で別れを惜しむ切ない気持ちなど、私には分かるはずもなかった。

土沢駅を出てから何度も列車を乗り継ぎ、どのようなコースをたどったのか私には分からないが、家族は新潟港から出港することになっていた。出航の日、新潟港の岸壁には見送る人、人でいっぱいだったように覚えている。また、開拓の歌らしい勇ましい曲がスピーカーから流れていたのも覚えている。船が大きな汽笛を鳴らし、岸壁を離れるときの家族の心境はどんなものだったろうか。「祖国よさらば」感慨無量であったに違いない。

歓呼の声に送られ日本を離れてから何日かかったのか、船は北朝鮮の羅新か清津の港に着岸。そこから列車で佳木斯（チャムス）に向かったと思うが、途中夜になると治安が悪いので、列車の窓から明かりが漏れないように、窓という窓に覆いを掛けた。

何十時間かかったのか分からないが、とにかく佳木斯に着いた。目指す開拓団まであと一歩である。私たちが入植する開拓団は三江省依蘭（イラン）県依蘭岩手開拓団であった。佳木斯滞在中は、列車の手配が付くまで、日本から開拓団に向かう途中の人たちが泊まる宿舎施設に何日間か滞在した。

開拓団に着いた。開拓団員は岩手県下閉伊郡岩泉町近辺から入植した人たちで、団長は小森茂穂氏であった。私たちは学校の東側の家に入ることになった。日が経つにつれて異国での開拓団の環境にも慣れてきて、我が家の生活も安定してきた。

四　開拓団時代の思い出

開拓団で父は教員になり、祖父母は畑を耕した。私たちには、軍馬が一頭払い下げられた。馬は金華号と名付けられた。金華号の年は私と同じ

七歳であった。祖父は開墾地に行くとき、金華号に鞍を付けて私を乗せて引いて行った。

ある日、畑の草を食んでいた金華号が、突然キッと両耳を立てて一点を見つめた。祖父と私がその視線を追ってみると、小高い山の峰にノロが数頭歩いているのが見えた。随分距離があったが、多分親子連れであったと思う。馬の視覚聴覚は鋭いと祖父に教えられた。馬は利口な動物である。

はるか彼方まで続く地平線から朝日が昇るとき、一瞬周辺が真っ赤に染まる。陽が沈むときも同じように周りを染める。日本では見ることができない大きな太陽である。大陸の雄大な風景である。

翌昭和十九年には、満人の手伝いが二人来て、開墾の方も大分はかどるようになった。それでも秋になって作物の生育状況を見た父の計算では、大豆の収穫量は不足だったらしく、近くの満人部落で大豆を買い求めた。不足したのは国に供出をするためだった。

昭和十九年四月、依蘭岩手開拓団にある松木川在満国民学校に一緒に入学した新入生は、六～七人であったと記憶している。入学したときは、土造りの古い校舎であったが、間もなく煉瓦造りの新校舎が落成し、そこに移った。私の妹、淑子が生まれたのもこの年であった。

私たちの開拓団には、本部落と西部落があったが、本部落の北側には丘陵地帯が広がり、その中に小高い山が一つあった。開拓団の人たちはその山をいつからとはなく「岩手山」と呼んでいた。はるか遠く、祖国にある南部富士とも呼ばれる岩手山を偲んでのことであったと思う。

この年の秋も深まったころであったと思うが、内地から一通の手紙が届いた。曾祖母の死を知らせた手紙であった。この手紙は、一カ月近くもかかって開拓団の我が家に届いたのである。決戦の気配濃厚な日本からの手紙が、よくも届いたものである。私たち家族を案じながら、一人淋しく息

を引き取ったであろう曾祖母のために、私たち家族はその夜、はるか彼方の祖国に向かい父が経を読み回向し、家族一同生前の曾祖母を偲び冥福を祈った。

翌昭和二十年、春のことであった。開拓団の一人が熊に襲われ大けがをして大騒ぎになった。この付近に熊が出没するのは珍しいことであったので、団の有志が早速熊狩りに出掛けることになり、父も我が家に伝わっていた短刀を槍に作り替えたものを持って加わった。周辺一帯を捜索したが熊は見付からず、捜索をあきらめて山を下りることになった。開拓地近く、みんなと別れて一人で家に向かってしばらく歩いたとき、探しあぐねていた熊が突然父の目の前に立ちふさがり、襲いかかって来た。父はとっさに、持っていた槍で熊の喉を刺した。しかし槍は急所を外れ、手負いになった熊はさらに凶暴になり、木につまずいてひるんだ父に襲いかかり、大きな鋭い爪で口元を引き裂かれ、喉にも爪で穴があき、右腕を折られていた。瀕死の重傷を負いながら夢中で戦っているうちに、熊は突然身を翻して逃げて行った。

父は必死の思いで開拓団に向かった。やっと団の人に発見され応急処置を受けたあと、戸板に乗せられ佳木斯の赤十字病院に運ばれたのであった。学校の内林校長先生はじめ団の人たちが集まって、父の無事と早期回復を祈ってくださった。家族は祖母が付き添いを兼ねて同行した。開拓団から病院まで車でも四、五十分かかるのに、徒歩である。何時間かかったのであろうか、幼心にも、私は父のことがとても心配だったことを今でも覚えている。

父が、付き添っていた祖母と一緒に佳木斯の赤十字から退院して来たのは、昭和二十年一学期が終わる頃だったと思う。治癒しての退院ではなかった。折られた右腕を首から吊り、口や喉の傷口を、毎日消毒しては薬を塗っていたのが記憶に残っている。

このころの開拓団にはもちろん車は無かった

し、電話も電気も来ていなかった。当然というか、ラジオも無かった。今振り返ってみると、山小屋にランプ一つで生活しているようなものであった。現代の暮らしに慣れきった人々には、あの生活はとても我慢できるようなものではないと思う。当時、新天地へと志し、希望を持って入植したばかりであり、開拓に精を出し、増産に励んでいた時代であった。しかも戦時体制下「お国のために」とか、「米英に勝つまでは」と国民全体が勝利を信じ、どんな不便にも堪える覚悟を持っていた時代であった。

父が退院したころ、開拓団の小森団長に召集令状が来た。三十八歳であったという。開拓団員は不安に駆られた。団の最高責任者であり、しかも中年者の召集である。果たしてこの戦争に日本は勝てるのであろうか。だれも口には出さなかったが、不安は拭い切れなかったと思う。続いて内村校長先生にも令状が届いた。私の祖父と父は、私のために買い求めて来た軍刀を、「お役に立つなら」と校長先生に差し上げたのであった。校長先生が応召されて、学校にはまだけがの癒えない父以外に教師はいなくなったのである。

五　地獄への旅立ち

学校の夏休みも終わりに近付いたころであった。団の本部に突然伝令が来た。「即、避難せよ」という命令であった。開拓団の人々はみんな驚き、右往左往する始末であった。そのとき私の家族はいつもの通り馬二頭、十数匹の豚、数羽の鶏を柵から出して家に帰って来たところであった。全部そのままにしてすぐ避難することになった。家で飼っていた愛犬も、置き去りにするほかなかった。祖父は以前博労(ばくろう)をしていたから、馬の扱いには慣れていたので、置き去りにされていた馬を引いて来て鞍を置き、私と少しの荷物を載せた。四歳の妹郁子は父が背負い、去年生まれた妹の淑子は母が背負い、家財はほとんどそのまま放置して出発することにした。服装は皆軽装であった。みんなの準備が整ったところで、団の人々は

一緒に開拓地を出発したのであった。
出発して間もなく松木川という川があったが、船がないからみんな筏で渡った。引いて来た馬は筏に乗った祖父が手綱を持って、筏の横を泳がせて渡ったのを覚えている。
川を渡って間もなくのところに満人部落があり、親日的な村長が「すぐ帰れるからもっと身軽にした方が良い。荷物は預かっておいてあげる」と言うのである。みんなそれを信じて、持って来た衣類や身の回りの物を村長の倉庫に置き、まったく着の身着のままで出発した。
私たち一行は土竜山に一泊、依蘭に向かった。依蘭の街は既に人影もなく、まったくのゴーストタウンであった。街を抜け郊外に出て、牡丹江（ボタンコウ）に差し掛かった。橋は爆破されていたし、川岸に停泊していた船は、ソ連軍の飛行機に撃沈されてしまった。祖父が連れて来た馬とは、この川に着く前に別れてきた。馬には随分世話になったので、感謝の気持ちがいっぱいだった。もう馬には乗れないから、これから先が大変だと思った。

六　祖父の被弾

依蘭は松花江（ショウカコウ）と牡丹江が合流するところで、土地は肥沃で古くから農業が盛んな街であった。私たちが川沿いの土手を歩いていたときであった。突然すさまじい銃声が聞こえ、足元の土手にブスッ、ブスッと銃弾が突き刺さる音がすると同時に、ヒュッ、ヒュッと頭上をかすめる不気味な音を初めて耳にした。「危ない、土手に身を伏せろ」とだれかが叫んだ。と同時に、「ワーワーワー」と祖父が後ろの方で叫んだ。振り返ると祖父が倒れていた。祖父はわずかだったが、食糧や着物などが入った大きなリュックサックを背負い、うつむきながら歩いていたらしい。右肩から右下あごが銃弾で砕かれていた。祖父は「待でじや（待ってくれ）！」と叫んだつもりであった。土手下に伏せた家族と、回りにいた人たちで応急処置をした。幼かった私にも血まみれになった祖父が痛々しく、見るのもつらかったのを覚えている。あの

とき私たち避難民を襲ったのが盗賊なのか匪賊なのか分からないが、恨んでも恨みきれない思いである。

我が家の悲劇はそこから始まったのである。負傷した祖父には祖母が付き添って、開拓団の人たちに遅れないように、ただただ必死で歩き続けた。父や母は「どこかに日本軍の駐屯地があれば、必ず軍医がいるから」と励まし励まし逃避行を続けた。しかし祖父は目に見えて衰弱していった。祖母や家族が心配する中、祖父は団の人たちに遅れまいと必死に歩き続けた。私たちが南へ避難する間に、武装解除された日本軍の一団が北に向かって行くのを何度か目撃した。ソ連軍の捕虜になった関東軍の兵隊たちであった。シベリアに連れて行かれたということは後で分かった。

ある時、北に向かう兵隊の一人が祖父の負傷に気が付いて、気の毒に思ったのであろう。兵隊が持っていた乏しい食糧の中からミルクの缶を差し出し、祖父を励ましてくれたという。ものを嚙むことができず、水しか飲めなくなっていたので、栄養のあるミルクをもらった祖父の喜びようは大変で、美味しそうに飲んでいた祖父の顔が忘れられないこと、祖父がミルクを飲むのを見ていた私や郁子たちにも飲ませたことを、祖母があとでよく話していた。今でもそのときの情景を考えると、祖父母の恩愛、有り難さに涙する思いである。私たち孫に対して本当に優しい祖父母であった。

七　祖父の死

九月初旬だったと思うが、祖父はとうとう精根尽きて、日本人開拓団の跡地で重体となった。幸い、近くに捕虜として駐留していた部隊の軍医さんに診てもらったときには、既に手遅れであった。祖母は兵隊さんに頼んで遺体を焼いてもらい、遺骨を抱いて帰って来た。私の大好きな祖父の死は、家族にとっても衝撃であった。以後祖母は祖父の遺骨を抱えて、開拓団の人たちと避難を続けることになった。

どこで野宿し、どこの部落の民家に泊めてもらったのか、当時幼かった私には分からない。ただ、祖父が亡くなるという悲惨な逃避行と収容所での越冬などは、断片的ではあるが今でもはっきり覚えている。

ある満人部落に泊めてもらったときのことである。私たちもある家に泊めてもらうことになった。家の主人に挨拶して一室に入った。祖母は祖父の遺骨を抱えていた。翌朝、朝食をとっていたときのことである。部屋に入って来た満人の主人は、祖母が持っていた遺骨の箱を指さし「大変大事そうに持っている物は何ですか」と聞いたので、父が祖父の遺骨であると説明した途端、主人は顔を真っ赤にしてすごい剣幕で怒り出したのである。あとで聞いて分かったことだが、中国では死体や遺骨は鬼になってしまう。鬼と同居は絶対にしないから、室内に持ち込むのをとても忌み嫌うそうである。父が誠意を尽くして日本の習慣を説明し、やっとの思いで許してもらったときの雰囲気を、子供ながらに覚えている。だから、みんなその日の朝食は喉を通らなかったという。

当時幼かった私には、開拓団を出るときから帰国までの悲惨な逃避行と、収容所生活の実態を順序正しく思い出すことはできないが、むざむざと忘れてしまうのもいけないと思うのである。激動の二十世紀に生き、戦争の犠牲になった我が家族の不幸な歴史を、私は生涯忘れることはできない。私の戦争に関する記憶は、国民学校二年生から三年生のときの記憶だけであり、戦後五十数年を経た今日、曖昧で断片的な記憶であるが、同じ満州から引き揚げて来た開拓団の人たちと話してみると、薄れていた私の記憶がよみがえってくるのである。それらを全部書き記すなら、原稿用紙千枚でも足りないほどであるが、文章を書くことが苦手な私には、とてもできることではない。あのときの地獄さながらの凄惨な状況を、今こうして思い起こしながら、何としてでも後世に伝えなければならないとの思いに駆られた。以下断片的

になるが「祖国日本に一日も早く帰りたい」と念じながら、亡くなった祖父たちの無念を晴らすためにも、もう少し書いてみたいと思うのである。

八　死線を越えて

開拓団の人々が避難の途中に遭遇した苦難は、想像を絶するものがあった。歩けなくなった高齢者を通河県達蓮河の街にある尼寺に預かってもらったが、その人たちがあとでどうなったかだれも分からないし、雨が降って増水し流れが急になった河を、ロープに縋って渡ろうとして濁流に飲まれたり、突然匪賊の襲撃を受けて高粱（コーリャン）畑に逃げ込んだり、喉が渇いても飲み水などなく、足跡に溜まった泥水を手ですくって飲んだりという試練を受けた。今思い出しても胸が詰まる思いである。誠に悲運な開拓団であった。

しかし何とかして生きて日本に帰りたい一心で、やっと方正県にたどり着き、合作舎（合同庁舎的な建物）の収容所に入った。朝晩がめっきり寒くなった中国の晩秋のころである。収容所の生活は最悪の状況であった。まず食糧が何ひとつ無かった。過労と飢えから病人が出た。虱が高熱の出る伝染病、発疹チフスを媒介した。連日死者が出た。もちろん病院も無く、したがって医者がいるはずもなかった。

そのような環境に置かれた私の家族も例外ではあり得ず、妹の淑子が十一月二十一日に亡くなった。わずか二歳であった。栄養が足りない母は乳も出ず、離乳食なども無く、ただ水を口に含ませるだけであった。苦しさを訴えることもできず高熱を出し、静かに息を引き取ったということである。北満の冬の寒さは半端ではない。外に出られない。この方正の収容所で越冬するほか方法が無かったと思われる。体力の無い乳幼児や老人が毎日亡くなっていく。妹の淑子が亡くなった悲しみが薄れる間も無く、私のすぐ下の妹郁子が亡くなった。十二月八日、享年五歳の幼い妹だった。飢えや寒さでどんどん体力を消耗していった。どんなに空腹であったことか、か細い声で「母さ

ん、美味しいお団子が食べたい」と何度も繰り返していたそうである。あとでこの話を私に聞かせるたびに、母はいつも涙ぐんでいた。母は、仏壇や墓前に必ず団子や大福を供えていた。幼いときに二人の妹を亡くした私は、兄妹の愛情を知らずに過ごしてしまった。私はそうした自分を哀れに思うことが度々ある。厳寒の方正収容所で、家族全員が栄養失調になった。食べるものが無いのだから仕方がない。兵隊が残していった鉄兜を鍋代わりにして、分厚い氷を溶かして飲むなどは毎日のことであった。我が家は、妹郁子が亡くなった二日後、今度は祖母が亡くなった。十二月十日、享年五十二歳であった。

祖母は夫が依蘭、牡丹江の堤防で凶弾に倒れ介抱のしようも無く途中で死に、どれほどショックであったろうか。大変気丈な祖母であったが、飢えと寒さで体力が衰え、追い打ちをかけるように虱による発疹チフスが命取りになった。高熱の中うわごとで「早く日本に帰りたい」と言っていたというから、方正で死ぬかもしれないと思い至ったことがどれほど悔しく悲しいことであったか、さぞや無念であったろうと思う。

そのころ収容所には満人が何人も入れ替わり立ち替わり訪ねて来て、私たちに里子の勧誘をした。「家に来れば毎日美味しいものが食べられる。綺麗な服を着せてあげる」など、あの手この手で誘ってくるのである。誘いに乗って、もらわれて行った人たちもいた。小森団長さんの家族も、いつの間にかいなくなった。校長先生の奥さんも幼い男の子に死なれ、娘二人を連れて満人のある家にもらわれて行った。残っている人がだんだん少なくなってきた。

私たちは、ある日強盗に襲われ、毛布など盗まれて困ってしまい、二階の山形県人のところに合流したことがあった。近くの広場に掘った埋葬所はたちまちいっぱいになり、死体はその上に積み重ねられた。冷凍死体の山ができた。物資が不足している満人が、死体から衣類をはぎ取って行

く。野良犬が食いちぎったのであろうか、腕の半分が無くなっている死体もあった。春先積み上げられた死体を馬車に積み込み、溶け始めた松花江に流したという。私の二人の妹も祖母も、松花江に流されてしまったのである。

九　ハルビン収容所

家族七人のうち四人を亡くし、とうとう父母と私の三人になった。方正の収容所にも遅い春が来て、生き残った人たちが一緒にハルビンに向かった。私は今ではどこをどう通ってハルビンに行ったのかは覚えていない。ハルビン市には、五月の中旬か下旬に着いたと思う。そのころには、私自身も栄養失調になっていて歩くこともままならなかった。少し走ったりすると、すぐつまずいて転んでしまった。頭の中は「あれを食べたい、これを食べたい」と食べ物のことばかりが浮かんでくる。餓鬼の世界である。

ハルビンの収容所は元日本人のための花園小学校であった。私たちは、二階の教室にアンペラを敷き詰めて生活を始めた。方正のときと違って陽気が良いし、何といっても都会である。大通りを挟んで向かい側には花園公園があり、にぎやかであった。公園の中には市場もあり、屋台が並んでいた。私はポップコーンの屋台のそばにいて、コーンがどんとはじけるとき、網からこぼれ落ちたのを拾って食べた。また野菜売り場に行き、切り捨てた大根の葉を拾っては、さっと家に持ち帰ったこともあった。配給される食糧は馬の餌にする高粱で、とても食べられたものではない。母は郊外の農家に手伝いに出掛けたりした。私にはよく分からなかったが、父も多分中国人の日雇いに出て働いていたと思う。近くに住んでいたロシア人の子供と友達になり、その子のお母さんがご馳走してくれたロシアパンのことを、今もよく覚えている。

一緒にハルビンまで来た叔母が、突然収容所からいなくなった。叔母は昭和十八年に国民学校の教員だった下田先生と結婚し、翌十九年長女和子

を出産したが、その和子も方正収容所で亡くして、悲しみのどん底にいた。あとで分かったことだが、内村さんの奥さんと二人で八路軍の看護婦を志願して入隊したということであった。

十　父との決別

ハルビンに到着してからの父は、同郷の知人や収容所の人々と、帰国のための準備や打ち合わせ、さらに収容所の待遇について当局との交渉など、結構多忙のようであった。

六月初旬のことであった。父は今までの過労がたたり、病の床に伏せてしまった。栄養失調の上に疲労が重なったのである。母が所用で留守の間であった。父は私を呼び、「母さんの言うことをよく聞いて母さんを助けるのだぞ」そこまで言って事切れた。間もなく何も知らずに帰って来た母は、事切れた父とそばで呆然としている私を見てびっくりし、急いで医者を呼んだのであった。医師の診断は心臓弁膜症であった。父は三十六歳で、私は小学校三年生であった。私はそれ以来、父の子に対する真の愛情を知ることなく育った。両親との絆、親子の情というものを育むのは幼年時代こそ大切で必要と思うのに、私にとって不幸なことだったと思う。帰国後も母ひとり子ひとりの生活が続いた。両親や兄妹が揃っていて、なお祖父母もいるという人の家庭がうらやましかった。私自身、一時期同じ生活をしていたから、余計そういう気持ちを強く持ったのだと思う。

昭和二十一年九月、いよいよ葫蘆島（コロトウ）から引き揚げるというときになって、母は同じ帰国者の中に病人がいて、その付き添いのために残留することになり、私一人が杉沢先生に引率されて先に帰ることになった。私のほかに、杉沢先生に連れられて日本に帰ることになった孤児は十人ほどであった。

葫蘆島を出た引揚船は、荒波にもまれながらも無事長崎の佐世保港に入港し、検疫のために数日停泊してから上陸した。引率の杉沢先生には大変お世話になった。杉沢先生は、私ら子供たちを郷

里岩手の各駅で待っていた身寄りの者に次々に引き渡すという作業を、淡々と果たされた。私は東北本線花巻駅で、祖父の妹である伯母に引き取られた。杉沢先生らは花巻駅からさらに北へ向かわれた。

母は十一月初めに看病の任務を終え、私が引き取られていた母の実家に無事帰国した。母は舞鶴に上陸したそうである。

十一　忘れまじ満州

敗戦というのは、こんなにむごいものなのか。平穏な家庭の七人家族のうち五人も外地で亡くし、私と母だけが残された。その母も実家に帰り安堵したのか、積もり積もった疲労のためか、脊椎カリエスにかかり、その後約十年患った。考えてみれば私たちの家庭は、敗戦とともに一年足らずのうちに破壊されてしまったのである。

敗戦間際に軍隊に召集され、敗戦と同時に捕虜となってシベリアに送られた兵隊たちや、遠い孤島で玉砕した部隊も多くあったとのことだが、開拓団の中にも集団自決した事実もある。国策といわれ満蒙開拓に家族を挙げて入植した私たち一家も、悲劇として幕を閉じたのである。

戦争による敗戦は別としても、必ず双方に永く禍根を残す結果となるであろう。玉砕も集団自決も、ともにどんな思いで尊い命を捨てたのか。どんな戦争にせよ、戦争は永く人を不幸に陥れるものである。戦争は悲しいものである。忘れまじ満州、ノーモア満州である。

男装の捕虜

茨城県　加倉井　文　子

一　おんなひとり

熱河省喀喇沁左旗（カラチンサキ）建昌街と言われて、「あぁそうか！　あそこか」とうなずける人は、永年にわたって満州で活躍していた人でも、数えるほどしかいないだろう。錦州から承徳を経て、古北口へ